



フアンジ の方の法

ゴーゴリのポエチカ

ユーリイ・マン

秦野一宏訳



訳者 秦野一宏 (はたの かずひろ)

1954年大阪生まれ。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了(露文学専攻)。現在、大阪外国語大学、関西大学非常勤講師。主要論文:「脱がない靴——ゴーフリのものを通してみた『苦の世界』」(有精堂『宇野浩二と牧野信一』再録)、「ゴーフリ世界における〈名前〉」(『ロシヤ語ロシヤ文学研究』18号)、「二つのペテルブルグ——『青銅の騎士』から『外套』へ」(『むうざ』9号)。

ファンタジーの方法 ゴーフリのポエチカ

一九九二年五月三十日 初版発行 ©

著者 ユーリイ・マン

訳者 秦野一宏

発行者 浅川彰三

発行所 株式会社群像社

〒101 東京都千代田区猿楽町二—三—一

振替 東京四一九五九四三

電話 (〇三)三二九—六一五三

印刷・製本 岩城印刷株式会社

電話 (〇三)三五七九—〇〇〇六

万一、落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

ISBN 4-905821-05-3 C0098



37550

АНН

ПОЭТИКА ГОГОЛЯ

フンタジ の 方 法

ゴーゴリのポエチカ

ユーリイ・マン

秦野一宏 訳

群像社

Mann, Yurii Vladimirovich (Манн, Юрий Владимирович)

ПОЭТИКА ГОГОЛЯ

Japanese edition © Gunzosha Ltd., Publishers, Tokyo, 1992.

This Japanese edition is published by arrangement with

VAAP (Copyright Agency of the USSR), Moscow.

カバー画／V. ブブノワ「外套」のための挿画より

資料提供／日ソ図書館

序 文

ゴーゴリ関係の文献は周知のように膨大なものであつて、その数は年々増大してゆくいつぼうである。作家の伝記、創作の道程、他の作家、他の芸術分野への影響等々の研究がこれまで積み重ねられてきた。

著者としては、すでに知られていることを繰り返したくはなかつたので、自身の視点から重要だと思われるいくつかの側面に注意を集中した。本書によつてこれらの側面の繋がりが読者に理解され、ゴーゴリ詩学の全体像が幾分なりとも明らかになれば幸いである。《詩学》^{ポエチカ}というカテゴリーには、よく知られているように、広狭二通りの解釈がある。狭い意味では詩的言語や文体の問題に限定される。広い意味では言語的要素のみならず、それ以外の文学的テクストの構造面の研究も含まれる。

詩学の広義の概念についてたとえば、V・V・ヴィノグラードフは次のように語っている。「言語芸術の作品を組織化する形式、形態、手法や方法に関する科学として、文学作品の構造上

の様式やジャンルに関する科学としての詩学は、(……) 詩的言語の現象のみにとどまらず、民間の口承文芸を含めた『文学』の極めて多彩な構造の諸側面を捉えようとするものである⁽¹⁾」

続けてヴィノグラードフは、そうした詩学のいくつかの問題を列挙している——モチーフと主題展開^{シュジエート}、手法と主題構成の原理、文学的時間、機能・文体的視点ならびに思想・テーマ的視点からみた言語の結合・運動システムとしてのコンポジション、ダイナミックな主題展開と弁舌による登場人物の特徴描写、ジャンルの特殊性、等々。

本書で展開される詩学とはこのような広義の意味をもつ。しかしながら、ゴーグリ詩学の多様な側面、とりわけ文体に関しては、問題を網羅的に取り上げる意図はなく、あるいは意図してもできない相談でもあるので(それは何冊もの本にならねばならないだろう)、本書ではただそれらを結びつけるいくつかの線だけを示そうと考えている。ということはつまり通常の詩学的側面(構成、主題構成、登場人物の造形原理など)と並行して、ここでは芸術的全体の種々のレベルを結合、連繫するようなものも考察の対象になるわけだ。たとえば現実的なものと幻想的なもの、精神と肉体の関係、《全体的シチュエーション》の問題などがそうしたものである(ただし「精神と肉体の関係」を扱った原著第四章は本書では省略されている)。実のところ、このような問題の取り上げ方自体が、「たとえばロマン主義からリアリズム原理へと創作方法を変えていったような」ゴーグリの進化によって示唆されたもので、その本筋はある程度まで、ゴーグリの芸術システムのしかるべき発展によりあらかじめ定まっているのだ(もちろん、この発展は決して今あげた問題だけに収束させてしまえるわけではない)。

われわれがいま述べてきたことはすべて、本書のテーマを理解するうえで必要な、予備的説明である。その詳細と具体的な展開については以後の叙述に拠りたい。

この書物は提起された問題の完全な解決を求めようとはしていない、と断っておく必要はあるだろうか？ 問題を解決すること——つまり、ある意味で偉大な作家の作品の意味を汲み尽くすということ——は、これまで誰ひとりとして成功しなかった課題のように思われる。いわんやゴッリのような芸術家の作品をやである。

「目次」

序文

1章 ゴーゴリとカーニバル的なもの

1 若干の予備的覚え書 12

2 ゴーゴリにおけるカーニバル化の要素 16

3 共同劇から逸脱する二つの方向 19

4 舞踏の場面 24

5 複雑化する両義性 30

6 悪魔を克服する方法 35

7 死に対する姿勢 43

2章 現実的なものと幻想的なもの

1 ベールをかぶった（ぼかされた）幻想について 65

2 ゴーゴリにおけるベールをかぶった（ぼかされた）幻想 83

3 幻想の担い手の除去——中編小説『鼻』 103

4 非幻想的な幻想 134

5 若干の結論 169

3章 『死せる魂』 叙事詩的基盤の上にある全体的シチュエーションおよび〈幻影的プロット〉

1 芸術的な普遍化について 177

2 『死せる魂』の二つの相反する構造原理について 195

3 生きているものと死んだもののコントラスト 214

4 叙事詩の構成について 231

5 『死せる魂』における性格の二つのタイプ 239

6 ジャンルの問題について 262

4章 ゴーゴリの公式の進化・その一面 301

5章 ゴーゴリ詩学にみられる若干の一般的要素 320

原注 366

訳者あとがき 401

ファンタジーの方法
ゴーゴリのポエチカ

〔原注は巻末に、訳注は各章末にそれぞれ付した。〕内は訳者による補足。原文のイタリック体は傍点もしくはゴチック体で示したが、文章の流れをよくするために訳者が傍点を付けたものも若干ある。原文の「へ」は適宜「」と「へ」に分けた。」

1章 ゴーゴリとカーニバル的なもの

この問題設定は、ゴーゴリの詩的世界に入るための鍵ともなりうるものだろう。M・バフチンの仕事をはじめ、一連の研究が示しているように、多年にわたって芸術、文芸に多大な影響を及ぼしてきた民衆的笑いの文化独特のスタイルが、カーニバルの要素のなかに体现されているからである。バフチンは、ラブレーの創作におけるカーニバル的要素を明確にし、このように強調した。「ラブレーはルネッサンスの一時期だけ、民衆の合唱隊、「ゴロス」の長であつたのだが、独特で難解な笑う民衆の言語を、きわめて鮮やかに、かつ十分に開示してみせたので、その作品は他の時代の民衆の笑いの文化にも光を投げかけているのである⁽¹⁾」。「民衆の合唱隊の長」と三世紀の時をへだて、近代のきわめて特異な滑稽作家として現われたゴーゴリの作品が、カーニバル的なものといかに関係しているかと問うことは理にかなったことである。

1 若干の予備的覚え書

まずはじめに、カーニバル的なものの基本的特徴を想い起こすことにしたい。ゴッゴリはこの点で、ゲーテの『イタリア紀行』にある有名なローマのカーニバルについての記述にも匹敵するような見聞記を残している。一八三八年の二月二日、A・ダニレフスキに宛てた書簡のなかでゴッゴリは、「今はカーニバルの時期だ。ローマじゅうがうかれ、騒いでいる」と伝えている。以下、その詳細な報告がなされているが、ここにほぼ全文を引用しておく。

「イタリアのカーニバルは驚くべきものだが、とりわけローマではそうだ——ありとあらゆるものの、通りでみかけるものはみな仮装しているんだ。どうしても化けることができない者は、毛皮外套を裏返しに着たり、面を真つ黒に塗りたくつてしまつさ。木や花が一团となつて通りをねってゆくし、ひっきりなしに、木の葉や花輪でうめつくされた荷馬車を通していく。車輪は葉や枝で飾られていてね、回転するとびっくりするような効果がでるよ。一方、荷車は、まったく古代のケーレースの祝祭そのまま、ロペールが描いた光景そっくりに一团となっている。大通りには撒き散らされた麦粉でできた見事な雪。《コンフェーティ》のことは噂には聞いていたが、こんなにもいいものとは思ひもなかったなあ。考えてもみろよ、とびきり可愛い娘の顔をめがけて、丸々ひと袋の麦粉を浴びせかけることができるんだ。ボルデーゼの娘だっつかまやしない。むこ

うも怒らずに、同じものでお返しさ……従者だって御者だって、みな仮面舞踏会の服装をしているんだ。別のところでは、民衆たちだけで飲み騒ぎ、仮装を楽しんでいる。ここでは何もかもごたまぜ。その自由奔放さときたら、たまげてしまう。おしゃべりするのも花を手渡すのも、まったくお気に召すまま、御随意にどうぞだ。幌馬車に忍び込んで彼らにまじって腰を下ろしてもいい……恋にはうってつけの幸運な時さ。ぼくのまわりにはロマンチックこの上ない話がたくさんもちあがっているよ……」

カーニバル劇の時には人間関係の新しい仕組みができあがり、一種独特な交わりが生まれる。その出発点は社会的な規則、規範からの逸脱である（ゴーゴリが幾度か述べているように、陽気なカーニバルの交際や求愛においては家柄などは問題にならない——「ボルゲーゼの娘だつてかまやしない」と同時に、道徳的、倫理的規範からの逸脱でもある）（その自由奔放さときたら、たまげてしまう）。当然、変化はまずもって身分の低い者に感じられる。ゴーゴリの記述は、突然、自分たちの前に開けた可能性を目にして喜ぶ《庶民》の視点へと自ずと滑り下りてゆく²⁾。

カーニバルの重要な要素である変身——仮面をかぶったり、毛皮外套を裏返しに着たり、あるいは単に顔を真っ黒に塗りとくったりして得られる外見の変化——も、ゴーゴリは書き留めている。着替えは「衣服と自分の社会的なイメージの取り替えであり」³⁾、パフチンが《上》の《下》への「位置転換と呼ぶ地形学的な変動を伝えている（少なくとも三つの面で転換が可能である。

すなわち、宇宙的に見れば天のかわりに地、社会的には高い身分層、階級のかわりに低い層、最後に、個体的・生物学的には、意識や思考をつかさどる器官としての頭のかわりに低級な人間的機能をもつ器官がくる。

ゴーゴリのお気に入りのコンフェーティ（つまり石膏や白堊、あるいは麦粉の小玉）の投げ合いかも興味深い——それは血まみれの戦闘から終末論の教義にいたるまで、恐ろしいと思われるものをことごとく和らげ、戯画化してしまうカーニバル特有の世界を実現している。死はもじられ、およそ止むことのない生命の自己運動のひとつの局面として、パフチンが両義性と呼ぶところの相反する原理が相互貫入するなかに収まる——「破滅、失墜と結びつくのは復活と更新であり、古いものの死と結びつくのは新しいものの誕生である。すべてのイメージは、死につつまれるものと生まれつつあるものという相反するものの合一に関与しているのだ」⁽⁴⁾。

最終的にゴーゴリの記述を通してはつきりと見えてくるのは、カーニバル的な感覚の本質が、一定の時間還元される民衆生活の一体性、不可分性であるということだ。劇に登場するのは例外なくすべてである（「……ありとあらゆるもの」）。可能な限りいにしえの伝統を維持していたローマのカーニバルは、祝祭のもつ普遍性によってゴーゴリを驚嘆させた。「別のところでは、民衆たちだけで飲み騒ぎ、仮装を楽しんでいる。ここでは何もかもごたまぜ」（ゲーテの記述を参照のこと）——「ローマのカーニバルは民衆に与えられているのではなく、民衆が自分たちのために催すのだ」⁽⁵⁾。

カーニバル的なものの担い手となるのは「孤立した生物学的な意味での個体でもなければ、

ブルジョワの利己主義的な個人でもなく、民衆、それも自身の進化によって永遠に展び、更新してゆく民衆なのである⁽⁶⁾」。

ゴーゴリの覚え書をめぐるカーニバル的なものの簡略な記述を締めくくるにあたつて強調しておかねばならないことは、カーニバルの哲学的解釈の伝統は今日になつて始まつたものではないということだが、その一事をもつてすでにカーニバルの意義のもつ重要性、不変性が裏付けられているのである。別の言葉で（ディオニュソスのなるものとして）、また、別の問題（悲劇の誕生）との関連で、カーニバル化の複合イデーを記したのはニーチェであつた。失われていた関係の体系が、ディオニュソス信仰において新しく生まれてくる。「ディオニュソスのなるものの魔力のもとでは、たんに人間と人間との間の盟約が再び結び合わされるだけではなく、疎外され、敵となり、あるいは隷属していた自然が再び、その放蕩息子たる人間との宥和の祭を営むのである。大地はみずから進んでその賜物を提供し、岩山と砂漠の猛獣たちは、おとなしく近寄つて来る。ディオニュソスの車には花と花輪がたくさん振りかけられており、それを引いて進むのは豹と虎である⁽⁸⁾」（浅井真男訳、『ニーチェ全集』、白水社）。『悲劇の誕生』の著者が力説するのは《下から上への》社会的混淆であり、また、それと結びついた両義性（相反する原理の相互貫入）に向かう全般的傾向、硬化したもの、不動のもの、伝統化されたもの一切を克服しようとする傾向である。「いまや奴隷は自由人となり、窮迫・恚意あるいは『厚かましい流行』が人間と人間とのあいだに確定した敵しくて敵意ある差別が、いまやことごとく崩壊する。いまや、世界調和のこの福音に接して、各人がその隣人と一致し、宥和し、融合したと感ずる……人間は歌いつ踊りつ、